岡　稔　君　を　悼　む

竹　浪　祥　一　郎

われは常にかれを尊敬せりき，
しかして今も猶尊敬す——
かの郊外の墓地の栗の木の下
　に
かれを葬りて，すでにふた月
　を経たれど。
　　石川啄木「墓碑銘」より

1

岡君がもうこの世にいないのだということが，彼の死後半年以上たったいまなお信じきれないような気になる。本を読みながら，考えごとをしながら，「このことを岡君ならなんというだろう」と心のなかでふとつぶやき，瞬間われにかえって，もう二度と彼と話すことがないのだという厳然たる事実の苦さを何度かみしめたことか。この世に不条理というものがあるとすれば彼がこんなに早くあの世へゆくほどの不条理がまたとあるものかと，死神の理不尽さを何度うらんだことか。

私が岡君に最後に会ったのは昨年の7月末であった。かねて手紙で「1～2 週間の予定で入院(検査のため)することに急になりました」と書いてきていて，そのまま病院生活が延びているときいていたので，たまたま上京した機会を利用して病院に見舞ったのだった。顔が黒ずんでいるのがすこし気になったものの，至極元気でベッドにすわり，いつものようにソ連，東欧の経済改革のその後についてあれこれ語り合ったあと，病院の出口まで送ってきて「土曜から日曜にかけて家へ泊りに帰ってもいいといわれているんだ。たぶん8月中ごろには退院できるよ」とうれしそうにいっていた。それが私のきいた彼の最後のことばとなった。

岡君との最初の出会いがいつだったかあまり明確でないが，彼が東京商大の特別研究生だった1949年ごろある研究会の席上のことと記憶する。たしか長洲一二氏(現横浜国大教授)といっしょだったように思う。それからまもなくであろうか，池田頴昭氏(現立教大教授)をふくめた研究グループが発足したのは。当時入手困難だったソヴェト文献を集めて，手さぐりのなかで社会主義経済の研究の道に踏み入ったのだった。当時大学の助手だった私にとって，3人の——時としてほかの人たちもはいっていたが——つどいはいわば生きがいであった。いまと比べると問題にならないほどとぼしい資料，恵まれない物質的条件のもとでひんぱんにかわした討論はみのり多いものだった。このなかで生まれたわれわれの親愛感は終生変わることがなかった。そしてまた，見せかけの権威やこけおどしの大言壮語からほど遠いところでの語らいはその後の私の生き方をも決めたようである。4分の1世紀近くも昔の物語である。

野々村一雄教授のきも入りで在京の若手の研究者たちに朝日新聞の秦正流さんなども加わって社会主義経済の研究会がはじまったのはいつごろからであろうか。中国研究所やいまはない世界経済研究所の部屋を借りて隔週に開かれる研究会はわれわれの勉強にとって最大のはげみだった。この研究会で岡君は中心人物の一人だった。彼のソ連経済の分析と理論的解明の鋭さはひときわ目立っていた。このころ彼の学問的力量は急速に高まり，ソヴェト経済研究者としての確固とした地歩をきずきつつあったのである。『ソヴェト経済の分析』(岩波書店，1956年)は彼の初期の研究の記念碑的著作であるといえよう。この本は一橋大学経済研究叢書の一冊として刊行され，発行部数も比較的少数であったが，専門家のあいだで高い評価をうけた。ソヴェト経済の再生産構造を解明したものとしていまだに現代的意義を失なっていない力作である。

1960年夏私が職場の関係で追われるように東京を去ってからしばらくのあいだ岡君との直接の接触はたえたが，約3年後私がふたたび大学へ復帰したあと，以前に変わらぬ親密さが復活した。しかし今度は東京と大阪に離れてであった。時機をみて上京したときの岡君との出会いは私にとってなにものにも代えがたい貴重なひとときであった。私にとってブランクだった何年かのあいだに岡君の研究はいっそう深まり，視野もいちだんと広くなっていた。50年代後半から60年代にかけて経済計画管理機構の改革，各種の経済指標，社会主義経済と商

品・貨幣範疇，数学的方法の再評価などの問題をめぐるソ連の経済学論争は彼によって十分に消化され，そのうえに立って彼自身の独自の見解が形成されつつあった。このころ主として『経済研究』に発表された一連の論文はこの過程をしめしている。こうした研究の努力は『計画経済論序説』(岩波書店，1963年)となって結実した。この本は「社会主義のもとでの生産計画と生産組織の問題」に考察の焦点をおいたものだが，その学問的水準はきわめて高く，ソ連や欧米の国際的水準をこえ，語学上の障壁さえなければおそらく外国でも話題作となるべきものと確信している。その内容は10年以上たったいまも輝きを失っていない。社会主義経済の本格的な勉強をしようとする者の必読文献ということができよう。

1966年岡君と私は相ついで在外研究への旅にでた。池田顕昭氏もまた同じ年に留学するはずであった。昔の仲間の3人がモスクワかワルシャワでいっしょになり，ウォトカでもやりながら見聞したことを議論できたらどんなに愉快なことだろうと出発前語りあったものだった。もっとも，実際には時期がすこしずつずれたため，3人が一堂に会する機会はついになかったのだが。一足先にでかけた岡君はモスクワで私を迎え，約1週間をともにすごし1カ月後には今度は私がワルシャワで岡君を迎え，数日をともにすごした。モスクワの国民経済博覧会の見学にいったことや，ワルシャワの文化宮殿内にある経済研究所へミンツ教授を訪れたときのことなど想い出はつきない。

帰国後『社会主義経済論』(筑摩書房，1968年)の共同執筆のこともあって，会う機会はさらにふえ，意見の交換はいっそうしばしばとなった。社会主義経済は変貌しつつあり，社会主義経済学もまた新たな展開をとげていた。50年代後半にはじまったこの過程はさまざまな波紋を呼び，その余波はわが国にもおよんできていた。われわれもまたその渦から外にいることはできなかった。変貌と新たな展開についてのさまざまな見方がうずまき，それは対立を激しくし，ときとして人間関係をひきさいていた。われわれはそうしたことを語りあった。語りあうことによって理解を深め，おたがいの意見の一致点と相違点を確かめたうえで，再会を約して別れるのだった。

やがて大学紛争が全国の大学を巻きこみ，われわれの大学もまた例外ではなかった。管理職にある私は多忙をきわめたが，一方，職務柄上京の機会はかえってふえた。上京するたびごとに岡君を呼びだすのだった。議論すべきことはあまりにも多かった。私の側からすれば，みたされぬ研究欲を岡君の研究成果をきくことで満足させていたということもあったろう。とぼしい時間に読み考えたことについて岡君の批判をあおぐ気持もあった。議論が長びき，昼食をはさみ，喫茶店を何度も変えながら議論をつづけたこともあった。多くのばあい，どちらかといえば岡君は聞き役だった。しかし短い批判と論評のなかにもっとも鋭い指摘のあるのがつねだった。それをききたいために私はまた長い説明をはじめるのだった。

3年ほどまえからわれわれのあいだで経済改革の実状を中間的にまとめる仕事を話しあっていた。岡君がソ連，私が東欧を受持ち，改革の中間的総括をしようということになり，たがいにプランを交換して検討を繰返していた。しかしおたがいの多忙さもあって，実現は先へ先へとのびていた。ただ資材・機械補給問題に限って各国の論争と改革の実状をまとめようということで，宮鍋幟氏と3人で200枚ほどのものを書上ることができた(『経済研究』第24巻第1号所載)。次の段階としてこの調査をもとに同じ問題について一本を書く話がでていたが，これも彼の死で，共同執筆の可能性は永遠にたたれたのである。

2

3冊の著書，40数篇の論文，多数の訳書を読みかえしてみて，私は名状しがたい感慨と一種の爽快な気分とにおそわれている。「黄金の50代」(高島善哉教授のことば)を目前にして逝った人がこれほど質の高い著作をこれほどまで数多く残すことができるものであろうか。そしてこの一貫した研究態度はどうであろう。私は学術雑誌以外の雑誌論文や日刊新聞にのった解説論文までできるだけ目をとおしてみた。改めて驚いたことに，どんな小さいものにも彼自身の見解が貫かれ，細かい神経が全文に行きとどいているのである。俗な言い方をすれば，やっつけ仕事やその場限りの仕事はまったく見られないのである。研究者としてそれは当然のことだといえるかもしれない。しかし，力作とならんで息抜きの仕事があり，2年もたてば人前もはばかるような文章が世間にはけっして少なくないことはよく知られている。じつは共著『社会主義経済論』の部分的改訂の話があるのだが，これについて生前の岡君が「書きかえるところはありません」といっていたことを最近きいて，仕事にたいする彼のまじめさをいま一度思い知らされたのであった。

岡君の膨大な著作をつうじて彼の研究方法のいちじるしい特徴が目につく。まず第1は彼が現実の社会主義経済の綿密な歴史的分析，現状分析と平行して，マルクス経済学の古典にまでさかのぼっての理論的究明を克明に

おこなっている点である。経済学の研究にとってこのような研究態度が不可欠であることはいうまでもないが，社会主義経済研究にあってこの点はとくに重要である。「史的分析ぬきの一般的理論的研究は内容のない空理空論になりがちだし，理論ぬきの現状分析は現象の説明に終わりがちである。もちろん人によってどちらかに重点がおかれることは避けられないが，社会主義経済研究者のばあい，岡君ほど両面においてすぐれている例はまれである。このことは彼の歴史的，現状分析をきわめて的確，堅実なものにすると同時に，その社会主義経済理論をとくに説得的で光彩あるものとした。「社会主義のもとでの価値法則」をめぐる論争，「ソ連における資本主義復活」をめぐる論争において彼の見解が多くの人々の批判(ときとしてそれは誤解と悪意をともなっていた)にたえぬいたのは，彼が社会主義経済の現実を知悉していると同時に，彼の経済学の理論的基礎が十分に強固であったことと無関係ではない。彼の天分，才能そして努力についてはいうまでもないが，その修業時代にアダム・スミス，『資本論』の研究に多くの時間をさいたこと(初期のいくつかの研究論文を参照)はのちの社会主義経済の専攻にあたって花を開いたように思われる。

これと関連して想い出されるのは，社会主義経済のもとでの価値法則にかんする論争が初めて日本に紹介されたころのことである。当時日本のマルクス経済学者のなかで「マルクスの価値論，商品生産論のどこからそんな見方がでてくるか」といった反応をした人はけしてすくなくなかった。「マルクスの資本主義経済論を裏返しにすればマルクス主義的社会主義経済論がでてくる」と断言する「大学者」さえ実際にいたのである。こうした状況が現在の日本の経済学界で完全になくなっているかはすこぶるあやしいが，このような方法で社会主義経済学を構築することはおそらく不可能であろう。

ソ連における理論上の論争はほとんどつねに現実のなかで提起された問題にいかに答えるか，現実の政策立案ないし政策変更を可能にする理論をいかにつくりあげるかとの観点からはじめられ，展開された(もちろん，だからといってその論争がつねに正しい方向に展開されたとはいえない)。それはけっしてたんなる資本論解釈論争ではなかった。価値法則論争にしても同じである。[社会主義のもとでの価値法則の問題提起の]「本来の趣旨はソヴェトにおける国民経済の計画化と管理の諸制度を改善し，各種の経済計算をもっと合理的なものに改めるための何らかの指針を労働価値論に求めるという点にあったのであり，私的所有と自然発生的分業に立脚する社会についての諸概念がどこまで社会主義経済と両立しうるかを吟味することにあったのではなかった。後者の問題はかなりの程度までマルクス経済学のターミノロギーの問題として処理することができる。しかし前者の問題はソヴェトにおける管理計画化機構と経済計算にたいして全面的な批判的検討を加えることと切りはなすことができない。」(「社会主義のもとでの価値法則」，『経済研究』第12巻第4号，303ページ)。そしてこの問題にかんする方法論的結論の「ひとつは，労働価値論についての固定的な解釈は，社会主義のもとでの計画化と経済計算にそれを役立てるという仕事を促進せず，むしろその妨げになるということである。いいかえれば，無政府的生産のもとでの不可抗力的に貫徹する趨勢的法則として定式化された一連の命題を，計画経済のもとでの機能的分析の用具に，直接に転用することはできないのである。」(同上)。つまり，『資本論』で述べられている商品生産がソヴェト経済に存在しているかどうか(ここで問題にしているのが部分的，例外的な存在でないことはいうまでもない)という問題提起は閑人にまかせておけばよい。それに肯定で答えるならソヴェト済経は社会主義経済でないことになるし，否定で答えるなら社会主義のもとでの価値法則をうんぬんすることがマルクス主義経済学にたいする無理解の証拠になり，いずれにしてもこのような問題提起者は自分の頭脳の「優秀さ」を誇りうるのである。岡君は「『資本論』読みの『資本論』知らず」ではなかった。「社会主義のもとでの商品生産にかんする議論はすでに20年の歴史を有するが，その間，社会主義生産が『資本論』でいうところの商品生産でないということは未だかって否定されたことはなく，常に前提されていたと私は考えている。……

問題は社会主義生産の性格規定を与えることであり，そのために社会主義生産を共産主義生産との同一性において，資本主義生産との対比において把握するだけでは不完全であり，一面的である。つまりその逆の把握によって補足することが必要であり，『社会主義のもとでの商品生産』にかんする議論の主要な意義はここにあったと私は考えている。」(「社会主義のもとでの商品生産」，『経済研究』第13巻第4号，362ページ)。

こうして岡君は，社会主義的生産が共産主義的生産とちがって「特殊な商品生産」と呼びうるような性格をもつことを認め，その理由を「社会主義のもとでの個々の勤労者相互間に，私的商品生産者相互間におけると同様の交換関係(等価交換の関係)が存在するという点」(同上)に求めた。つまり共産主義のもとでの「欲求に応じ

た分配」の原則とはちがい，社会主義のもとでは「労働に応じた分配」の原則が支配する点に求めたのである。これは社会主義的生産の商品的性格の根源を2所有制(国家的所有とコルホーズ的所有)の存在や労働の異質性に求める見解よりもはるかに説得的であった。

このように，価値法則，商品生産のような「周知の」概念が社会主義経済の実践にてらして再構成されるわけだが，同じことは「利潤」についてもおこなわれた(「社会主義と利潤」，『経済研究』第15巻第1号を参照)。

以上のことを逆の側から次のようにもいえる。岡君は歴史的分析や現状分析をたんにそのものとして終わらせることなく，たえず理論化につとめた。ソ連の経済改革にかんして岡君は詳細かつ系統的な紹介，解説を数多く書いているが，同時に彼は「社会主義経済にかんする若干の新しい概念と接近方法について」(『経済研究』第17巻第1号)。「社会主義経済における計画と市場」(『経済研究』第20巻第1号」で大胆な理論的問題提起をおこなっている。前者はソ連経済の「『脱皮』や『体質改善』の理論的整理」をめざしたものであるが，スターリン死後十数年におけるソ連の政策面の変化の根底にあるものは「情報，利害，効率の3点にほぼ集約される」との重大な結論に達している。また後者では計画と市場の非両立性の問題に取組み，「商品生産と資本主義生産とが相違するように，計画対市場の問題は社会主義対資本主義の問題と相違している」ことを立証している。これら2論文は社会主義的所有にかんする論文とともに後期のもっとも主要な労作であり，そのテーマは今後さらに究明がつづけられるはずのものであったように思われる。

次に，岡君のソ連経済の歴史的，現状分析そのものについて，その手固さは数多い社会主義経済学者のなかでもまれにみる存在であった。膨大な，ほとんど手のとどくかぎりの資料をあさり，これを読破したうえでまとめあげたソ連経済分析はまことに見事なものであった。この面で彼は徹底的な実証主義と執拗なまでの資料の追求をおこなった。すでに A. M. バイコフ『ソヴェト同盟の経済制度』上巻(東洋経済新報社，1954年)の訳序のなかで彼は「貧弱な事実的資料や単なる臆断にもとづいて，性急な一般化をおこない，自らの好むところの主張を『立証』しようとする著書や論文が数多い」ことを指摘したあと，「メリケン粉ばかり多くてイーストの少ないパンのようなもの」(つまり，事実の叙述があまりに多く説明があまりに少ない)というバイコフの本にたいする C. H. P. ギフォードの批評にかこつけて次のように書いている。「メリケン粉がなくては(あまりに少なくては)，イーストだけではぜんぜんパンにならないし，またたとえ両者の混合が渾然としてよろしきをえても，腐敗菌や細菌が混入していては，パンの外見はいかに美麗でも，食用には適しない。」

その後の彼の著作はこの自らのことばの実践であったように思われる。彼は膨大な資料をあさり，綿密な分析をおこないながらも，確信をもてないときには，けっして「性急な一般化」をあえてすることはなかった。それはときとして私にあまりにも慎重すぎるとさえ思われるほどであった。彼にとって「資本主義復活」論争の論敵たちの主張は，その論理的推論のことはさておき，ソヴェト経済改革の内容にかんする知識の程度を疑わせたのであった。

岡君の数多い著作を大別すると，(1) ソヴェト経済の再生産構造　(2) 国民経済管理機構改革　(3) 社会主義と商品・貨幣範疇　にかんするものがある。これらの問題が体系的に追求されていたことは驚くほどである。(1)の問題をフォローしていくうちに(この一応のまとめが『ソヴェト工業生産の分析』であった)，経済計算，経済指標の問題をつうじて(2)および(3)の問題の探求に入りこんでゆく。価格形成，労働生産性，価値法則と商品生産にかんする1958年から1962年にかけての一連の論文はこの探求のなかで精魂をかたむけた努力の結晶であり，その総括が『計画経済論序説』であった。このための努力がどれほどのものであったかは『序説』の末尾にあげられた200点に近いソヴェト経済文献が物語っている(私はその数の多さだけをいうのではない。世上しばしば自著を参考書リストで飾る風習があるのだから。岡君がこれらの文献のすべてを読破したことに私はつゆほどの疑いもさしはさまない)。

ソ連で経済改革が始まると，岡君の関心はこれに集中した。『序説』にまとめあげられた見解は「改革」の理論的前提であったのである。『経済研究』『一橋論叢』『エコノミスト』『世界』などに発表した彼の著作はたんなる解説や調査の域をはるかに脱し，理論的武器をもってする改革の本質究明であったが，さらにいくつかの論文でその「理論的整理」がなされたことは前述のとおりである。そして過去20年近いソヴェト経済研究の中間総括ともいうべきものが『社会主義経済論』の「序論」と「ソヴェト連邦の社会主義経済」の項であった(本の性質上教科書風的叙述ではあるが)。

岡君が生前私にもらしたところからみて，彼は社会主義経済学にかんする一本の準備に取りかかっていたようである。『社会主義経済論』が歴史的，現状分析に重点

をおいたものであるのにたいして，これは社会主義経済理論の叙述をめざすものであった。資本主義とは本質的に異る広義の共産主義の一部でありながら狭義の共産主義とは異る社会主義の経済制度の本質が究明されるはずであった。計画と市場の問題，社会主義的所有の問題はおそらくその内容の一部であったろう。これらの問題の究明の第一歩はすでに印せられていた。しかし未解決の面もなおすくなくなかった。「この著作に一応のけりをつけたうえでソ連・東欧の経済改革にかんする総まとめをしよう。改革の展望には不分明の要素が多く，いまのところ中間的にせよ結論をくだすのはあまりにも早すぎるようだ」というのが岡君の考えであった。そして，解決のためには彼の頭脳が不可欠なこれらの学問的課題をのこしながら，彼は永遠にわれわれのもとを去っていったのである。(1974. 2. 20 記)

(桃山学院大学経済学部)

季刊理論経済学　第25巻第1号　発売中

《論　文》
篠原三代平: 360円レートへの仮説
福岡正夫: ケインズ経済学のミクロ理論的基礎: 展望と評価
松山敬左: 外乱のある離散型線型システムの可観測性と可制御性について
Takashi Negishi: Involuntary Unemployment and Market Imperfection
Ryuzo Sato: On the Class of Separable Non-Homothetic CES Functions

《覚書・評論・討論》
Ken-ichi Tatsumi: Transaction Costs and the Precautionary Demand for Money
鴨池　治: 消費・貯蓄・資産選択の多期間計画モデルと1期間資産選択問題

B5判・80頁・500円　理論・計量経済学会発行／東洋経済新報社発売

農業経済研究　第45巻第4号　発売中

社会主義農業論

《論　文》
阪本楠彦: 社会主義と農業
島津　猛: ソビエト農業における集団化過程・現実のコルホーズおよび自留地問題等に対する若干の考察
藤村俊郎: 中国の社会主義農業
——「農業は大衆に学ぶ」大衆運動を中心にして——
石田　進: アラブ「社会主義」における土地改革
——農地収用，再分配をめぐる一評価——

《研究ノート》
廣吉勝治:「工業化・都市化」と農漁結合の崩壊過程
——京葉地帯におけるノリ養殖業崩壊の再検討によせて——

B5判・50頁・360円　日本農業経済学会編集発行／岩波書店発売